

あしがら 農の会

通信 8月号

第124号

2012年 8月7日発行

発行

NPO 法人 あしがら農の会

ホームページ

<http://nounokai.com/>

代表 松本 邦裕 090-1735-3748(携帯)

編集 石井 智子 0465-32-1467(TEL/FAX)

bombalurina@savanna.dti.ne.jp

地場 旬 自給

あしがら農の会はあしがら地域に様々な循環を作りたいとの思いから、地場、旬、自給を掲げて、1993年に設立されました。(2003年にNPO法人化)
地域の中の休耕田を借りて自給のための米作りから始まった会は、現在以下のような活動を行っています。

農産物の宅配: 会に賛同する野菜の生産者と、地域で自給の為の野菜の作り手が集まって、無農薬・無化学肥料栽培の野菜宅配を行っています。(その他、米、お茶、果実、卵、鶏肉、豚肉などもあります)

田んぼの会: 現在約100家族以上が、あしがら平野の13カ所で自給用の稲を育てています。

お茶の会: 山に戻ってしまうお茶畑を、市民で手入れできないかと始まりました。5月には参加者約100名が、各自1年分のお茶を摘み取ります。

大豆・味噌の会: 大豆は7月に苗作りから始まり、11月に収穫します。その大豆と、各自が田んぼの会で作っているお米で、1月には麴づくりから味噌作りを行っています。

小麦の会: 月1キロの小麦の自給を目指します。

その他、四季折々の行事を行っています。関心のある方はどなたでも参加できます。

有機の仲間たち ~其の八~ ・漆屋農場・

スローガンは『老人よ、大志を抱け!』

ボクが農業をはじめたのは2年前の5月。農業を営んでいた父の急逝がきっかけでした。

それまでは東京で農業とは無縁の生活を送っていたのですが、あまりに突然過ぎる父の死に慌てふためいたボクは、葬儀の席上、うっかり「父が愛し、守ってきた畑を引き継ぎます。ボク、お百姓さんになります!」と挨拶してしまっただけです。自分の言葉に自分自身がビックリ! 父親を突然失った己の境遇に酔っていたとしか思えません。農業どころか肉体労働の経験すら皆無。そんなボクがお百姓さんに!?

ボクの家は小田原の東のはずれにある橘地区のさらに片隅。小規模農家がひっそりと軒を連ねる「沼代」という集落にあります。小田原の「忘れ去られた小さな秘境」とでも申しましょうか。ボクがこの地を離れた20数年前と何ら景色の変わっていない、開発から取り残された里山地域です。多くの若者が家を出て住民の高齢化ははなはだしく、70歳の母さんが「若い人」と呼ばれている現状。徒歩圏内に商店はなく、信号機も無ければセンターラインの引かれた道路もろくに無い。生活するには不便極まりない地域です。でも、この地に戻り、改めてこの地を見渡してみても思いました。「ココでならやっつけていけるかも」と。

ある意味、世の中と「隔絶」した里山で、80歳、90歳のお年寄りが昔ながらの農法でつくった野菜を食べ

てみたいと思う人は、少なからずいるんじゃないかと思ったんです。雑木林に囲まれた小さな畑と小さな棚田。聞こえてくるのは鳥や虫、蛙の声だけ。そんな環境で育った農産物。しかも、商品として育てられたモノではなく、自家消費用につくられた野菜を自分の食卓に並べたいと思う人は、少くないんじゃないかと思ったんです。ボクはまだ百姓としては半人前ですが、この老人たちの半世紀にも及びキャリアを活かして、『お百姓さんの自家消費野菜のお裾分け』サービスとして都市部の顧客に売ることができたら、ボクはこの地で生きてゆける。そう確信したんです。

この地のお年寄りにとって、農業はお金を稼ぐための労働ではありません。朝起きたら歯を磨くように、日が昇ると畑に立ち鋤を振るう。それは限りなく「生きる」ことに近い、「生の営み」とも言うべき活動なんです。だから、そんな老人には死ぬ間際まで元気に働いてもらおうと思っています。そして、自分のつくった野菜が人に「喜び」を与えていることを感じてもらおうと思っています。今はそのための地盤作りに奔走中。老人たちの気持ちをコチラに向けるために、日々ゴマをすり、肩をモミ、おだて、笑顔を振りまいてあります。もちろんボクだって働きますよ。そんな人生の大先輩に教えを乞い、自然に寄り添った昔ながら伝承の農法をマスターして、一日も早く一人前のお百姓さんになりたいと思っています。

『老人をコキ使って小銭をガッポリGET!』それがボクの夢。『老人よ、大志を抱け!』それが我が里山の新しいスローガンです。

漆屋農場/林やすなり(43歳・独身)